

社会性発達過程を考えたセラピープログラム

日 高 正 宏*

<はじめに>

カウンセリングを必要とする人々は、子どもたちでもまた大人でも、人間関係に躓いている人が多い。また、場面緘黙や学校恐怖など、非社会的な子どもたちも、教師反抗やいじめなどの行動的な子どもたちも、社会性の発達に課題が残されている場合が多い。

人間関係、社会性の発達は、知的発達、身体的発達とともに、幼児期の大切な発達課題である。

発達心理学的には、社会性の発達の順序は明確である。

ここでは、子どもの社会性発達を整理し、そのことと、相談所などでのセラピーのプログラムを考えたい。

図1の上の段は、通常社会性発達過程を示すものである。

新生児期、乳児期のはじめは自他の区別もない混沌とした状態であるが、次第に意識状態がはっきりし、自分のからだの部分遊び相手として遊んでいるように思える時期がある。手の指や足の指を吸ったり噛んだりしている時期である。

0歳児は人間関係といっても、母親など、主たる養育者との関係だけに生きていることが多い。遊びといえば、自分の手足と戯れるような一人遊びが多い。イナイイナイバァーを喜ぶようになるのは、イナイイナイの間の数秒間の記憶が保たれるようになってからである。

1歳になって歩けるようになると、家族以外の他人との出会いが生じる。その時に言葉が生じるのは、泣けば通じる家族関係から、泣いても通じない他人とのつきあいに必要だという意味もある。

1歳後半から2歳で、家の中では、母親が見える範囲に居れば、一人遊びも可能になる。しかし、この段階の子どもを連れて、近所の児童公園に行くと、子

どもは母親から離れられなくなる。それは、新奇場面での不安からで、砂場なら砂場で遊んでいる2歳3歳の先輩たちが、何か乱暴なことをしないか、犬が来いかなど、安心できないで、母親の背中に隠れたり、もたれたりしながら、周囲を観察、様子見をしている。しかし、まず大丈夫だろうと感じると保護者の側を少し離れてみる。砂場の場合は砂場の縁まで行ってみたりする。しかし、「○○ちゃん遊ば！」などと先輩から声を掛けられると、また保護者のもとへ逃げ帰る。このようなことが繰り返され、長い場合には2・3ヶ月もかかる。しかし、いつか、安全感が得られると砂場の中に入る。そこで起こってくるのが平行遊びで、みんな電車ごっこをしても、全員が運転手で、役割分担はなく、共同遊びにはなっていない。みんなが砂のお団子を作っている、お団子のやり取りは無い。ただこの段階から、他人の作ったお団子を踏みつぶしたり、玩具の取り合いをしたりというもめごとは起こる。

平行遊びからかなりの期間を経て、2人遊びとなる。そこには役割分担が生じる。

2人でもめたり、協力したりして遊べるようになってから3人遊びに移行するには、通常1年かかる。3人というのは人間関係が難しく、ふたりが話すと1人が余るので、常に緊張が伴う。そこで、3人遊びが完成すると、4人・5人遊びは比較的早くできるようになる。世界中で小学校入学が6歳であるのは、読み書きのレディネスの問題もあるが、大人がひとりついていれば、集団行動が可能になるからだとも考えられる。しかし、がき大将に率いられた町内子ども集団が無くなった今、小学校1年生で40人学級はほとんど不可能になっている。従って、1年生は10人学級、2年生は15人、3年生は20人などという、段階的拡大を考える必要がある。

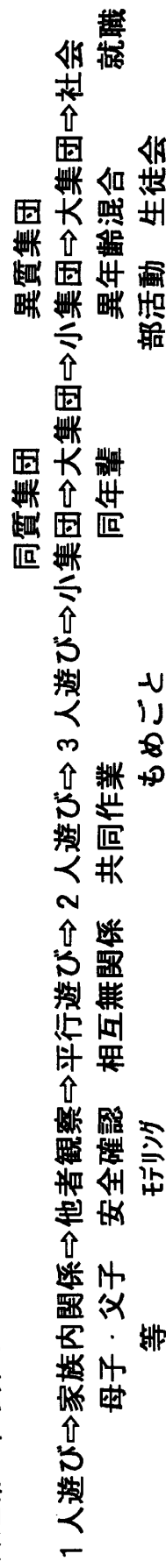
保育所や幼稚園で集団経験をする子どもが多いが、先生の管理下におかれた集団では、昔のような3歳児

* 本学キリスト教人間学科教授（人間関係学、キリスト教人間学）

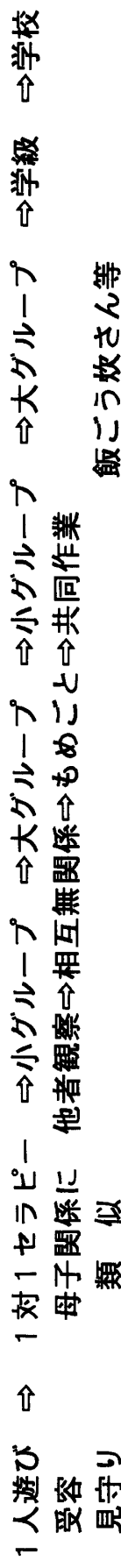
社会性発達過程とセラピープログラム

カウンセラーを必要とする児童・生徒たちは、反社会的であれ非社会的であれ、社会性、集団適応性の発達に課題をのこしている者が多い。いったんは大集団に適応しながらつまづき、退行を起こしている場合もある。そこで、通常の社会性発達過程に従って心理リハビリテーションとしてのセラピープログラムを設定する。

☆通常の社会性発達過程



☆心理リハビリテーションとしてのセラピー・プログラム



上記の発達過程を参考にしながら、ひとりひとりの状態によって、段階的にグループ拡大をする。とくに野外料理などでは、子どもたちが、集団の中での苦しさ、楽しさ、もめごと、自己抑制、他者配慮自己主張、協力、信頼、信頼、工夫などの体験をするようにプログラム設計をする。美味しい料理を食べることが目的ではなく、集団作業の中で、幼児期に足りなかった人間関係のもめごとや楽しさを補うことが目的である。

図 1

のもめごと経験は不十分であることが多い。

小学校入学後、同年輩同質集団での遊びが続くが、中学年からクラブ活動が始まり、異年齢混合集団の経験が始まる。また、次第に児童会や運動会などの大集団経験も積み重ねられる。クラブ活動も小学校では教師主導であるものが、中学に進むと次第に生徒の自主運営に変わっていく。

このようにして、次第に人間関係が拡大し、異年齢異質集団での適応能力が育ち、就職して社会に出ていくのである。

図1の上の段は、一連のものではあるが、これは転居などしない場合のことであって、子どもの発達を観察すると、転居転校などで見知らぬ人々と一緒になると人間関係はやり直しとなり、社会性は何段階か後戻りする。例えば高校1年生は、4月に大変疲れて帰宅するが、それは通学距離の問題だけではなく、新しい人間関係に緊張して疲れている面もある。ちょうど2歳児のように、見知らぬ同級生や教員を観察しているのである。そこで、もし全員が違う中学校から進学したのであれば、名簿番号が近いとか、帰り道が同じであるとかいう地理的近接要因で、自分よりも少し弱そうな相手に声をかけ、ふたり遊びとなる。そこから3人遊び、4人、5人と拡大する。多くの場合、6月ごろには数人の人間関係ができるようになる。幼児が数人遊びに至るのには数年を要するが、高校生は3ヶ月ぐらいで数人遊びに至るのである。大人もまた同じで、人事異動があったり、転職したりすると、はじめは静かにして周囲を観察するところからはじめる。転居の場合もそうで、まずは観察し、無難そうな人と付き合いはじめ、次第に人間関係を拡大していくものである。

この、通常の社会性発達過程を、セラピープログラムとしてやり直すのが、これから述べる方法である。

<不登校の場合>

学校恐怖タイプの不登校は1960年代から生じたが、今では大学生の不登校や社会人の出勤拒否にまでつながっている。70年代から80年代にかけて増加の一途をたどり、例えば京都市の中学生の場合、病気や怪我でない50日以上欠席者は、1974年から1988年にかけての15年間に約10倍に増えている。その後は生徒数の減少ともなって人数は増えていないが、発生率は下がっている気配がない。

筆者の30年以上の心理臨床経験からすると、学校恐

怖タイプの不登校は、登園をしる幼児から中学生・高校生に至るまで、どの年齢で休みはじめる場合も、幼児期、とくに3歳時の自由遊びの経験が少ない場合が多い。3歳児が他家の3歳児とともに遊ぶということは、おおかた一日中けんかをしているようなもので、砂でお団子を作っても誰かが踏みつぶす、ブランコに乗ろうとすると、誰かが横入りをする。滑り台でも誰が先に行くのかもめる。3歳児はけんかしたり仲直りしたり、泣かせたり泣かされたりして一日を過ごすものである。がき大将が率いる近所の子ども集団があった時代には、12・3歳の者から、2・3歳の幼児まで、一緒に遊んでいたが、がき大将は、親や先生と違い、年下の子に、良いことも教えるが悪いことも教える。また、3歳児どうしがけんか、もめごとを起こしても、見守るだけで止めようとはしない。その見守りの中で3歳児はさまざまなことを学んでいく。ところが、後程不登校になる児童・生徒の場合、この3歳時のもめごと経験が不足していて、結果的に給食が嫌いだとか、運動会が嫌だとか、ちょっとしたことで休んでしまうことになる場合が多い。

中学生・高校生が学校を休みはじめると、周囲の大人たちは、つい、学校で嫌なことがあったのかななどと本人を問い詰めることが多い。しかし、リンチ事件などが無い限り、そこで出てくるのは休むきっかけに過ぎないので、本当の原因は、幼児期の社会性体験不足にあると思われることが多い。

そこで、セラピーとしては、幼児期に足りなかった人間関係のもめごとを補う必要が生じるのである。逆に言えば、補いによって積み残しの発達課題が達成されるのである。

<場面緘黙の場合>

場面緘黙の場合は、不登校よりももっと小さい時、多くは0歳時からの、家族以外の人との人間関係の経験不足に起因していることが多い。中には、外で遊び始めた3・4歳の頃に、外で怖いことを体験し、その時から家族外では喋らないようになったとか、学校で発言した時にみんなに大笑いされ、それが心理的外傷になっている場合もある。しかし、殆どの場合は、単に乳幼児期からの社会的経験不足によることが多く、特別な事件によらないことが多い。

他人との人間関係の不足は、双生児であったり、年子であったり、従兄弟姉妹が同じ敷地に住んでいたりと、家族内遊びで足りていた、などの場合もある。

身内遊びだけで、他人との人間関係不足が見られるのは不登校の場合にもあるが、場面緘黙の方が極端であるように思われる。

また、家族にも特徴がある場合が多く、父親が非社会的で、友人を家に連れてくることもなく、ただ黙々と食事をするような場合と、非常に強権的に子どもたちを抑えつけている場合がある。母親も近隣で友人もなく、おとなしいタイプと、非常にお喋りで元気なタイプがある。いずれにしても、子どもがその発達過程で、よその子どもとさまざまな体験をすることを、背後でじっくり見守ることが不足している。転勤・転居などにより、親自身が近隣の大人社会で新しい交友関係を作ることに失敗しており、結果的に子どもの交友関係を狭めている場合もある。

さて、不登校や場面緘黙の原因をこのように捉えようと、対処も考えられる。すなわち、単に受容的なプレイセラピーをしているだけでは社会性の発達が補われないのである。

＜心理リハビリテーションとしての セラピープログラム＞

そこで考えられるのが、通常の社会性の発達過程を丁寧やり直すセラピープログラムである。

どの段階からやり直すかは、ひとりひとりの子どもの状態を丁寧に観察し、家族の話を聞きながら考えていく。

例えば不登校で自宅に閉じ籠もり、父親とも顔を合わすことを避け、自室や押し入れにいる、あるいは昼夜逆転して家族とも顔を合わさない場合なら、グループセラピーはとてもできない状態であるから、社会性は0歳から1歳の、母親とのみ付き合える状態に退行していると考えられる。従って、セラピーの場合も、1歳児にとっての母親のような、若い女性のカウンセラーの担当とし、初対面の時には、男のカウンセラーは表に出ず、女性スタッフだけが、膝をついて眼の高さを子どもと合わせるぐらいに気を使ってやさしく迎える。プレイルームも受容的雰囲気との和室などが望ましい。とくに何かをさせるセラピーではなく、カウンセラーも寝ころがってマンガの本を読むぐらいののんびりした雰囲気が良い。トランプや卓球などのゲームをしても、はじめはカウンセラーが勝たないように気を使う。初回にカウンセラーがゲームに勝つと、次回から来談しないようなクライアントさんもある。しかし0歳1歳児と母親の関係のようなセラピーから、

次第にゲームではカウンセラーも勝つこともあるという1対1の関係に持ち込んでいく。これでやっとふたり遊び段階である。

カウンセラーとクライアントのふたりが対等な遊びができるようになり、なお、クライアントさんの顔の表情が自由な喜怒哀楽を示すようになると、そこから次の段階へ以降する。大きな相談所では、同じ程度の社会性リハビリテーションの段階にある子どもたちも通所しているので、カウンセラー・クライアント1対1セラピーをしている者同志を何げなく引き合わせる。はじめから1時間の合同セラピーは無理があるので、通常の週1回、1時間のセラピーの帰り間際に、「あっちの部屋の玩具を借りに行こう。」などという形で引き合わせることもある。高学年や中学・高校生であれば、セラピープログラムを説明して引き合わせることもある。初めて出会った子どもたちは、緊張する。それは丁度、家の中では一人遊びできる1歳児を、児童公園に連れて行った時のような状態で、安全基地であるカウンセラーの背後に隠れて、初対面の相手をのぞき見るような状態である。無理をしないで、何回か、カウンセラー・クライアント2組の4人でプレイをした後、カウンセラーのひとりが抜けて、カウンセラーひとりとクライアントふたりの3人遊びに移行する。同時進行の他の来談者の都合がつけば、子ども4・5人とカウンセラーふたりなどと拡大する。

はじめは緊張していた子どもたちが、次第に遠慮がなくなり、わがままも言えるようになる。この段階、すなわち、ほぼ同年齢・同質集団の段階でも、互いの刺激は意味があり、新しく不登校グループに入ってきた子どもが、帰り道で親に「あの子らはひどい。1年も2年も学校行ってない子がいる。ぼくなんかましや」と言ったり、場面緘黙グループに新しく入った子どもが、自分もしゃべらないのに親に「あの子ら、全然しゃべらないから面白くない」と言ったりすることもある。

グループが成熟していて、担当カウンセラーとの人間関係が十分であれば、主訴についてグループでオープンに話し合ったりすることもある。ある時には不登校グループのメンバーが、「裏山で、学校行っとらへん後輩を見つけた。」と言って連れて来たこともある。そんな時には担当カウンセラーが「新しい仲間が来たぞ。みんな自己紹介しよう。どれぐらい学校休んでるかも言わなあかんで」などと笑いながら話題にすることもある。

最初、不登校のことなど話題にすることができないぐらい緊張していたのが、「勝った！勝った！僕の

方が長いこと休んでる」ぐらいまで言えるようになると、もう不登校問題に囚われていないことになる。

＜異質小集団への移行＞

不登校タイプとか場面緘黙タイプとか、ほぼ似たような主訴の子どもたちの同質小集団でみんなが自由に自分の感情や意思を出して振る舞えるようになると、メンバーたちはずいぶん生き生きしてくる。

同質は大切だが、年齢は同じでない方が直接競争関係にならないので楽な場合もある。同質近年齢で活発になって来たところで、別主訴の、できれば教師反抗などの乱暴なタイプの、すなわち異質な主訴のクライアントさんをひとり入れる。それは、次第に学級や学校と同じように多様な人間関係を体験するためである。

ある不登校集団に教師反抗の生徒を入れた時には、反抗的な生徒が、肩で風を切るように入室し、「何や陰気臭いやつらばっかりやなあ。お前ら、学校行っていないんか」などと言っていたが、卓球をすると、毎週プレイルームで卓球をしている不登校生徒の方が強く、反抗的な生徒が卓球に負けてしまったことがある。反抗的な生徒は「おもしろい。やめじゃ」とか言ってラケットを投げたが、その時不登校の女子生徒が「ラケット投げたらスポーツと違うやろ。あかんやん」と言って対抗した。こうなるとその女子生徒はもう登校再開も近いと言える。もちろんこの場にカウンセラーが弱い子の背後の守りとして見守っていることが大切である。

学校では、やんちゃな児童・生徒の方が多いが、教育センター、児童相談所などではむしろおとなしい児童・生徒の方が多い。これはグループワークの上では都合が良いこととも言える。お互いタイプが違う児童・生徒が互いの社会性リハビリテーションの役に立つのである。

このようなグループダイナミクスを見ていると、子どもたちの自我と社会性は同時に発達することがよく分かる。単に周囲の人に合わせるのが社会性ではないということもよく分かる。自己主張もしながら、なお、周囲とも協調していくことが社会性なのである。

＜野外集団セラピー＞

異質小グループセラピーがうまく機能するようになった頃、野外のグループワークをプログラム化する。

このグループワークは、全体がメンバーセンタード

グループワークとなるよう、上からの指導や規制はなるべくしないで、リーダーの役割は情報提供と危険防止のみとし、極力見守るようにする。ロジャースのクライアントセンタードカウンセリングの考え方でグループワークを行うようなものである。

なるべく、幼児期に足りなかっためもごと経験を補うように、協同作業を取り入れる。そのためにいちばん有効なのは、野外料理であろう。

朝、集合するが、この集合時間があてにならない。申し込んでいて来ない児童・生徒もいる。また乗り物酔いのある子どもたちのことも配慮が必要である。従って、行き先はあまり交通不便でなく、遅れても参加でき、なお自然があり、行く途中で料理材料の買い物ができるところが良い。経験を多様化しプログラムを複雑化するため、ガスコンロではなく、焚き火のできる場所が望ましい。

メンバーが集まったところで、グループ編成をする。できればグループ分けも児童・生徒に任せるが、主訴、年齢、男女などを考え、カウンセラーがグループ構成することもある。

料理材料購入のためのお金を各グループに渡すが、それも、年長者にではなく、グループの輪の真ん中に「このお金、このグループで自由に使ったらいいよ。」という形で出す。誰がお金を握るかというもめごとはじめである。

この段階で、主催者が注意をすることは、お酒を買ってはいけないことと、インスタント物の禁止だけである。

現地へ行く途中、電車の中などで、各グループごとにメニューを考えるが、グループ担当のワーカーは直接指導せずに、弱い子どもたちが発言できるように背後の守りとなる。多くの場合、はじめの15分ぐらいは、どこのグループもカレーライスメニューとなっている。そこで、ワーカーは「よそのグループは何を作るのかなぁ？」などと発言する。すると、チックや吃音タイプの活動的な子が「ぼくが聞いて来る。」などと言いだして、情報収集に回る。「みんなカレーライスや。」などと言って帰ってくるので、ワーカーは「交換出来なかったらおもしろくないなぁ。」などと少しだけ刺激をし、また話し合いを続ける。ある不登校の男子小学生は、みんながバーベキューなどと言っている時に、ひとり「湯豆腐」と言った。これは、小学生らしくなくて、言いにくい発言であるが、それを言えたことは、自己主張の経験である。その後間もなく、この小学生は登校再開した。

メニューを決めるだけでも時間がかかるので、実際に現地で料理をするのは大変時間がかかる。小学生だと3時間近くかかると考えた方がよい。

野外集団料理と言っても、美味しいご飯を食べることが目的ではない。むしろできれば料理は失敗すればいいとすら考えて見守っていることが大切である。料理に失敗があれば、メンバーの話し合いが生じる。話し合いというよりもめごとである。ご飯がこげれば「お前の水が足りなかった」とか「いやお前が火を炊きすぎだ」とかもめる。カレーライスが辛すぎたら、「お前がカレー粉をたくさん入れたからだ」とか、「いや野菜が足らん」とかもめる。その中で、幼児期に足りなかっためごと経験が補われるのである。

もし、ワーカーが料理をして失敗したら、「何や、先生下手やなあ」で終わってしまう。料理がうまくできたら「先生、上手やなあ、うちのお母さんよりうまい。」で終わってしまい、メンバーの経験とならない。グループワークは、体験の中で各個人の成長がなければ意味がない。

筆者が属していた組織的教育キャンプをするボランティア団体の標語は「創造と協働」であった。不便な野外の、水道やガス、台所のない所での集団作業は、子どもたちにもスタッフにも、創造性と協働性を要求し、育てていくのである。

<まとめ>

民主的グループワークでは、各グループのプログラムの、①計画 ②実行 ③総括 が、すべてメンバーの話し合いによって行われるところに特徴がある。

この考え方は、クルト・レヴィンたちの、有名な電球生産工場での小集団実験から知られていることである。しかし、日本の子どもたちの社会性発達に問題が目立つ昨今、この考え方をカウンセリングに取り入れることは、ぜひとも必要なこととなっている。幼小中高だけでなく、大学生でも人間関係がうまく出来ない学生は多い。筆者のクラスにも、このような小集団からはじまる社会性リハビリテーションが必要なタイプの学生が見られる。

ここに述べた考え方は、相談所に通う児童・生徒だけではなく、どのクラスにでもいる児童・生徒にも応用できる考え方である。ひとりっ子、一人娘、一人息子、友だちができてにくいなど、特に目立った問題があるわけではないが、運動会や修学旅行など、集団行

動場面ではどこかなじめない児童・生徒は、今問題がなくても、将来の就職などを考えると心配になる。要はどんな大人になりたいのか、を目標とすると、分かり難い問題も整理し易い。

どう考えたらいいのか戸惑うような児童・生徒・学生に出会った時、図1に示すような図式的把握をすると、方針も立ちやすく、保護者との話し合いにおいても一緒に方向を考え易いものである。

社会は多様な人間の多様な関係の中で成り立っている。将来社会人になるということは、いろんなタイプの人と、臨機応変に対応できるということでもある。このような将来像を持つと、児童・生徒・学生本人ともまた保護者とも、問題ある現状にとらえられることなく、建設的な教育やカウンセリングを進めることができる。

文 献

- 1) 日高正宏 1981 場面緘黙の多面的療法 日本心理学会第45回大会発表論文集
- 2) 日高正宏 1982 場面緘黙児の心理的特徴と心理療法 キリスト教保育専門学院保育年報 Vol.2.
- 3) 日高正宏 1983 非社会的な人々 臨床教育心理学 創元社 第10章